

どいへるもの、頗る騎法に熟せしかば、土岐大學頭朝澄、松下伊賀守當恒、御旨をうけて、彼等を引つれ、小金の牧にいたり、駒をとらしめしに、馬にのりながら、むらがる駒のまん中に入捕んとおもふ駒をよく見定め、のりよせておのが馬よりかの駒の背に乗うつり、平首ねぢておしたふしとるありさま、目を驚かすはやわざなりしとぞ、後江戸に歸りしに、吹上の御庭にめして彼の者ども御覽ありしに、頂の上に永くおひたる毛を、女の髪のごとくむすび、身は鶉衣に股引をつけしさま、わが國の人とも見えず、されど言語は伊豆の國人にたがはざりしとなむ。

〔總常日記〕こ、は谷[○]釜[○]小金が原のうちにて、上野原の牧といふ所也、其駒とりのさま大かたをい

はんに、此野は上總下總にわたりて、横四十里におよぶとぞ、其野に十所ばかりもやわかちあらん、高さ一つゑあまりの土道^どをつきて、一かこみのうちを又三つにかこひわけて、かりそめの木戸をひらき、牧使三人^{正使}、副使二人、綾蘭笠をいたゞきて、狩そうぞくして馬にまたがり、おほくの野駒をのりまはしさをひたて、木戸より入ておくのかこひにのりいれば、それにつれて野駒どもきそひいる、いくたびかかく追入て、牧使は土道のうへなるかりやに居て、駒の毛づけにやあらん、筆とりてゑるしつけをり、さて五疋づ、中のかこひへ入て、列卒ども大づなをめぐらし居て、駒を中にとりこめ、用にあたるべきをば、牧使それとさしをしふるを待て、かりこの中にをさだちたるもの一二人、駒のくびに引かくべきわなを、竹杖につけもちて、おひまはし打かくれば、一人はたゞちにいだきつきておしたふす、また一人やがて口繩はませて引たつ、四五人そひて引たて、かこひより十町ばかり西に、かりそめの厩めく處有につなぐなり、いとあらし駒は、かくひかれゆく道にて、藪に横入するも有とぞ、かこみの中にあるほども、くびづなか、らじとて、土道を越て逃出んとするを、土道の上にかりこどもおほくむれゐて、まもとをもて追おろす也、かくて五疋がなかにえり残されたるにも、用にあたるべきが年わか、く、又は來んとしには用にあ